

あとがき

元 勇 準

文字の書かれている出土資料の歴史はかなり古くまでさかのぼる。我々が実物を見ることはできないものの、『漢書』には、漢の景帝の期、魯の恭王が孔子の舊宅を壊してその壁から古文経傳を得たと書かれており、おそらくこの記録が出土資料に関するもっとも古い記録であろう。また『晉書』にも汲縣の不準が魏の襄王の古冢から竹簡・小篆の古書を得たという記録が見える。二千年以上の長い歴史の中で、短編的な発見にすぎなかった出土資料文献は、近代になって殷虚の甲骨文や敦煌石窟の文書などが発見されて以来、様々なジャンルの竹簡・木牘・帛書などの発見が相次ぎ、もはや膨大な量に達している。これは、現在進行形であって今後も増えつづけていくだろう。その中で古代中国の楚地域（いまの湖南省と湖北省を中心とする）から出土した、楚系文字で書かれている楚簡は、歴史・思想・言語といった人文學全般にわたって貴重な価値をもつことから多くの中国研究者の間で脚光をあびている。

ここで楚系文字の出土資料について簡単に概括してみる。まず、1930年代に湖南省長沙市から楚帛書が発見されて以来、57年には信陽楚簡、81年には九店楚簡、87年には包山楚簡、93年には郭店楚簡などが発掘された。なお、考古學の発掘によるものではないが、94年には香港の文物市場から上海博楚簡が発見された。このような出土・発見によって楚簡研究も飛躍的な発展を成したわけであるが、特にここ数年間の楚簡研究はインターネットという新しい媒体に負うことが大きいと言えよう。

簡帛研究網 (<http://www.jianbo.org/>) や簡帛網 (<http://www.bsm.org.cn/>) などで代表されるインターネット上の論文および報告は、その情報・研究成果が迅速に世界中に共有され、従来とはまったく異なる新しい研究の場を切り開いているのである。

個人的には、パソコンで作業しながら、紙が存在しなかった時代の書物（竹簡）がふたたび紙以外の媒体（モニタ）を通じて伝えられているという事実に、長々しい書記の歴史を感じたことがある。近い将来、本を買う代わりにインターネットでダウンロードするのが一般的になる日がやってくるかもしれない。実際に現在もCNKI網などのサイトを通じて論文をダウンロードすることができる。

しかし、インターネットの論文が限界性をもっているのも事実である。たとえば、著者は入力したはずの文字が、壊れて映ったり見えなくなったりする場合もあるし、引用後にネット上の論文が修正される場合もあり得る。最悪のケースはハッキングやホームページの閉鎖などによって、論文がなくなってしまう可能性も指摘することができよう。

このような面から考えると、現時点ではネットの論文は補助手段にした方が良いので

はないかというのが私の考えである。つまり、ネットで発表したとしても最終的には學術雑誌や書籍に再収録しなければならないと思う。いくら IT 社會が進化しても、人類が存在する限り、紙の本固有の價值が落ちることはないだろう。

最後に、本誌の創刊號から本號まで、原稿の請託・整理・編集など刊行の全分野に當たり、李承律先生（東京大學専任講師）が時間と苦勞をおしماず、携わってくださった。先生に深甚の謝意をここに獻じるものである。

（東京大學博士課程）